

「ナショナリズム」

2016年02月29日

『週刊金曜日』に「ナショナリズムは誰に、何をもたらすのか」と題した私の投書が2月26日号に掲載された。2月11日のホームページに書いたが、転載して、書き加えたい。

哲学者の萱野稔人氏が『成長なき時代のナショナリズム』（角川新書）を著し、ナショナリズムを問い直すことを提唱している。本書で萱野氏は、たとえば安保関連法に賛成する立場だけがナショナリズムではなく、反対する立場も「国民主義」という意味においてナショナリズムであると言う。特定秘密保護法、安保関連法に反対するナショナリストが立ち上がることに期待したい。韓国の軍事政権下、民衆は民主化を求めて壮絶な闘いをした。彼らは「民主救国宣言」と、民主化することによって、韓国を救うのだと宣言した。熱烈なナショナリストである。その主張は本来、自国民の安全と平和だけでなく、他国や他国の人々からも支持と賛意が得られるものでなければならない。その意味において、大国の身勝手な国益中心のナショナリズムには大いなる疑問符が付く。2001年、米国は「同時多発テロ」攻撃を受けた。その直後から現地では熱烈なナショナリズムが吹き荒れ、街のいたるところに星条旗が掲げられた。米軍はウサマ・ビンラディン率いるアルカイダへの報復を大義名分にアフガニスタンを猛爆した。さらに大量破壊兵器があるとイラクを攻撃し、フセイン政権を倒した。だがその結果、IS（「イスラム国」）が台頭して現在に至っている。米国を中心とする有志連合は、世界を揺るがし続けている。攻撃されるかもしれない、という疑いの条件がそろえば先制攻撃も許されるという発想さえ自明になっている。米国の第28代大統領ウィルソンは「民族自決」と言った。グローバル化した時代には「民族自決」はもはや死語なのであろうか。大国の横暴なナショナリズムを許すと、その陰に無辜の市民の計り知れない犠牲が生じる事実を認識すべきである。他国に軍隊を駐留することは侵略であるという「常識」を回復し、軍事介入を止めさせる国際的な世論を育てる知性が求められる。少なくとも、ナショナリズムは誰に、何をもたらすのかを見通す真摯な視点が必要である。

地域の老人会が中心になって「戦争体験を語り継ぐ会」をしている。宗教者として、平和について話す機会が与えられた。私は旧満州で生まれた中国侵略者の末裔であると話し始めた。3歳の頃、ごみ箱を漁っていた中国人女性から石を投げられ頭に怪我をした。彼女は中国に入り込み、横柄に振る舞う日本人が憎くてたまらなかった。大人には反抗できないので、幼い私をターゲットにしたのである。今、彼女の怒りを重く理解することができる。軍隊を駐留させ、日本人街に育った私は侵略者の末裔と言わざるを得ないと実感している。

私の信仰を育ててくれた日本基督教団は1941年、政府の要請を受けて合同してできた教団である。その時の信徒の「生活綱領」は「一 皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ各其ノ分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ 二 誠実ニ教義ヲ奉ジ主日ヲ守リ公礼拝ニ与リ聖餐ニ陪シ教会ニ対スル義務ニ服スベシ」と謳っている。キリスト教信仰より皇国史観を優先させている。このような「生活綱領」を定めた教団は時の政府の言いなりになり、戦争に加担していった。朝鮮のキリスト者は神社参拝を拒否し、多くの殉教者を出したが、教団はそれを「国民儀礼」として推奨した。アジアの諸教会にアジア解放の「聖戦」に参加するように呼びかけた。

教団は1967年に「戦争責任告白」を出し、謝罪を明確に公表した。過ちを悔い、許しを請うことで、世界に認知され、教会の責任を果たせるように新しい出発をした。従軍慰安婦、南京虐殺を認めることは自虐的であると主張する人は絶えないが、歴史を直視し、過ちを率直に認めることが和解をもたらす、平和を造りあげていくと話した。求められるナショナリズムは過去を正視し、命の尊厳を守る現在を構築し、平和な未来を展望することである。